

今日はね。

vol.13

漫画です。
エッセイ
これは

姉の話を
いたします。

私には姉が
いるのですが

ぶつちやけ
あんまし
仲良く
ありません。

というか
嫌われて
います。

私は好き
なの水…。

まあそれは
私の愚行の
ためなので
しようがなく。

よって姉の
様子は
母づてに
聞くことが
ほとんどです。

マジか…
姉ちゃん…

〈毎回、こうびくりな内容〉

特に姉の
仕事関連の
話は面白く

私の職場で
話したところ
大好評でした。

作家さん
ちやうどこれ
何とかして
マカニよ

先輩
えい!
あつらい
ですー

玉砕でした。

ダメ。

あ…
は…

なのでネタに
して良いかと
会った際に
聞いたところ…



ダメな理由を教えてくださいよ。

ねーダメ？
本当にダメ？

ダメだって言ってるでしょ

仕事関連は職場に迷惑かけるから絶対ダメ！

母運転中

かんばって
くいとがって
みた。

車内



しゃーない...
あきらめますか？

姉の仕事はなかなか特殊なため

偽名で描いたとしても特定される可能性が捨てきれず

結局姉の仕事話ネタはこのことになりました。

が

他所であんまりおしゃべりな

ん



成人してからあらためて気づいたことですが

姉の好みや感性はちよつと特殊であるので

繊細な
女王様気質。

思い返せば色々面白いエピソードの持ち主であるのです

なので...



仕事以外の話しならいいですか？

のこ聞いた後なので何だかびびる。でも聞く。

どの話だ？

お前は...
何を描くつもりだよ。

あぁあ!?

言質
とつたり。



①私との
記憶に
食い違いが
ある。



②特に理由の
無いNG。



こんな時は
魔法の呪文



でも結局NGなしでオツケー出ました。

前説です。

本題に入る前に
姉がどんな人間か
ざっくりお話し
しますね

まず特筆
すべきは
気性の
強さ！

機嫌が悪い時は
本当に近づかないに
限ります！



私は一時期
姉と同じ部屋を
使ってたのですが
機嫌が悪い時には
当然部屋から
追い出され

兄弟と一緒に
家から
追い出された
こともありました

習字などの
作業中の
物音も
ダメです。



あととはとても
正しい人で

私が
尊敬する
彼女の性質で

昨日常で
当たり前の
ずるさや
不正を

彼女に見ることは
ありません

加えて彼女の前で
それらを
しようものならば…



めつちや
軽蔑
されます

幼い私には
生きてるのが
罪悪感になる
レベルでした。



前説② 彼女の好む もの

そんな彼女の好むものは衛生的に優秀なもの

そして人外です

ざっくりしてありますがマジですよ！



前者は特に人体を清潔に保つものです

なので彼女の風呂は家族のなかで一番長かったです

そして問題は後者ですが……



思いつくものをあげていくとこうなります

- 動物
- 虫
- 植物
- 妖怪系
- オカルト
- 本
- 姉の好きなもの etc

人が嫌いというわけではない様ですが……

人外に向ける情熱には目に見えて違いがあります

最近のは知らない。

*古い記憶にとどきます。



図にするとこんな感じですよ。



あ。私よりも重要です。

上にいほど大切。

自分で予想してあげて



① 事件 ①

ある日の夜
我が家に
超巨大な蛾が
迷い込んで来た
事がありました。



我が家は
あまり生き物を
殺さない
タイプなので

殺虫剤どころか
この蛾を
殺すという
発想すら
ありません
でした。

殺すのは
致し方ない。



蛾救出 作戦会議の 始まりです。

ティッシュで
くるんで外に
出すサイズじゃ
無いよね...
絶対
バタバタ
するし...

何かのパックで
上からおさえて...
下から紙を
入れるとか...



私が
やろう!



事件①-②

熟考の末
作戦はカップと
紙を使用し捕獲

実行は姉に
託されました



いざ実行と
なるも…



そして
暴れる蛾。

やめろ!
動くな!

鱗粉
落ちちゃう!

どうまでも
蛾の心配を
する姉。



その後
無事救出と
なりました。

ほりや
外じや
お行き



ナ○シカかよ…。



事件②-②

前述した
ことですが

姉は中々に
鋭い気性の
持ち主として

お母様の用事なんかで
声かけこんなやつ。

こゝか喋んなやつ

私の場合は
特に。

私用で
声をかける
など
はつきり
言って自爆
行為です。

しかし
事態は
急を要す！
(かもしれない)

カエルはキライ
だから殺生は
嫌ま私。

私は罵声を
覚悟しました！

いくぜえええ！！

お姉ちゃん！

すみません！

お母さんが

掃除機で

カエル

吸っちゃった

つぼくって

多分死んで

るんだけど...

生きてるかも

しれなくて...

ちよつと

わかんないんで...

(カエルを)

助けて

くれませんか！

どっつ？

ガチャッ

一階の台所
です

カステテ...

ドアめっちゃ
すぐ開き
ました。

事件②-③

その後
姉によって
カエルは救出
されました。

どっ！

カエル
どっ！

あー
お姉ちゃん

実は
掃除機で…

聞いたからっ！

しかし
カエルは
死んでおり

どうやら
掃除機で吸った
時にはすでに
死んでいた
様でした。

カエルは
姉の手によって
庭に埋められ…

てたような
気がします。

あはん

ぶっちやけ
この先よく
おほえて
ないです。

如何でしたか？

色々描きましたが
私は姉を
本当に尊敬して
おります。

もつと色々
話とか本人から
聞きたいけど
未だに怖いので

きつと今後も
近寄れないと
思います♪

今回はこれでおしまい。

今日はね。 vol.13

<http://p.booklog.jp/book/80705>

著者：童

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hagurumawarashi/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/80705>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/80705>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ